

『少年愛の美学』とフロイトの反復説

"Shonen-Ai no Bigaku" and Freud's Recapitulation Theory

高橋孝次

TAKAHASHI Koji

要旨 『少年愛の美学』は、性愛の二元論が展開される、稲垣足穂のもっともよく知られたエッセーである。従来本書は「啓蒙の書」とされてきたため、主にその感性的了解を促すような特徴的な語り口が研究の俎上にあげられてきたが、本稿では『少年愛の美学』の理論的基盤の形成過程に社会的文脈を導入することで、性愛論が形而上学へと変化する様態を跡付けることを目的とする。そのために、フロイトの『性理論三篇』と『少年愛の美学』の比較から、フロイトの「反復説」こそ『少年愛の美学』の核となる理論であることを明らかにし、フロイト言説の理解の転換点をヴァリアント分析から導く。さらに、フロイト受容の経緯から、『少年愛の美学』形成史において重要な役割を担う江戸川乱歩の存在を浮上させ、フロイト言説とともに「A感覚」や「宇宙的郷愁」といった足穂文学の重要概念をも戦前の同性愛研究を引き継ぐ乱歩の媒介なしに成立し得なかった可能性を指摘する。

一 文芸的啓蒙の文書——『少年愛の美学』

『少年愛の美学』（徳間書店、昭43・5）は、『一千一秒物語』（金星堂、大12・1）の忘れられたモダンズム作家・稲垣足穂が再び衆目に触れるきっかけとなった、記念碑的エッセイとして知られている。

『少年愛の美学』は、古今東西の「少年愛」・「同性愛」に関する膨大な歴史的資料、証言、体験談の断片を引用・陳列し、それらの事象の背後にあるものを「A感覚」「V感覚」「P感覚」という記号

化されたセクシュアルな身体感覚の関係性によって読み解き、性的事象のみならず、あらゆる文化現象をA的なもの、V的なもの、P的なものへと分類・裁断していく。ここでは、男性器の性的感覚を表す「P感覚」は、女性器の性的感覚を表す「V感覚」の裏返しにすぎず、「V感覚」も肛門感覚を表す「A感覚」の代理の感覚にすぎないとされる。そしてあらゆる感覚、性的事象、文化現象の上に少年の美に対応する「A感覚」を最上位に置いた美学（価値体系）が当て嵌められ、徹底した「A感覚」の二元論が試みられる、「稀代の奇書」と呼ばれる所以である。

茂田真理子氏は「同性愛に関する作品を足穂の真骨頂だと考える

向きも少なくない」と足穂への言及の傾向を指摘しながら、「稲垣足穂に対して与えられてきた一般的な定義づけには「新感覚派作家」と「同性愛作家」の二つがある」とし、「同性愛に関する作品」すなわち「少年もの」が、読む側にとって「どうしても取り扱いにくい、浮き足だつて見える存在」であることを指摘している。²それは、女性が排除される「少年愛」というテーマ自体の扱いにくさであるとともに、奇妙なまでに記号化され、抽象化された「A 感覚」という操作概念の捉え難さでもある。

『少年愛の美学』を頂点とする「A 感覚」エッセイについての言及に目を通すと、次のような但し書きに出会う。

タルホについて説明することは空しい。わけても、彼の「A 感覚の哲学」を解説し、そこにたとえばフロイトの精神分析やハイデッガーの存在論との近親性を確認することは、そうすることが「理論」を対象とする筆の常道とはいえ、いや、常道であるがゆえにひどく空しい。(中略) 説明はいずれ啓蒙の閉域にほどよく納まるにすぎまいし、アレにかんするわれわれの無知と迷蒙をあざやかに晴らすように、そのじつ啓蒙ほどタルホから遠い仕草はまたとないからだ。

タルホの「A 感覚」は断じて説明されるべきものではなく、ひとえに同調され、同調のはてむしろ不断に応用³実践されるべきものである(渡部直己「A 感覚」善用の祈り『ユリイカ』昭 62・1、傍点原文)

ここで「説明」「解説」が撃退され、「同調」「応用」「実践」「善用」が強く推奨されているのは、『少年愛の美学』の叙述における事実確認の側面と行為遂行的側面の混同に対して注意喚起するためと考

えられる。なぜなら、『少年愛の美学』というテキストの特質は、「少年愛」や「A 感覚」という内容よりもむしろ、「A 感覚」について論理的説明をせず、読者に呼びかけ、感性的に直接了解するよう求める次のような語り口にこそあるからである。

読者はたとえば「沃野」の二字を眼にとめて、何を思うであろうか？ もしも貴君が、遠雷が轟くたび毎にのろのろと、恰も生きもののように身悶えして、動いている遠い野づらがそこに連想されるというのであったなら、あなたは私の抽象の「尻池」を了解してくれることであろう。(『少年愛の美学』『稲垣足穂全集』第四巻、筑摩書房、平 13・1、七〇頁)

つまり、『少年愛の美学』(に代表される A 感覚テキスト群)の内容(事実確認的側面)を論理的に分かり易く「説明」「解説」してしまえば、『少年愛の美学』というテキスト本来の特質である語り口やレトリックの効果(行為遂行的側面)はこぼれ落ちてしまう。『少年愛の美学』はテキストと読者の相互作用としての行為遂行的側面こそ重要であり、「同調」応用³実践³善用³によってしか、それらは掬い取れないのだということが渡部氏の但し書きの真意であるといっている。

足穂自身、『少年愛の美学』の日本文学大賞受賞に際して「先人未踏の境地を開拓すべく青少年らを鼓舞刺戟する文芸的啓蒙の文書である。」(プラトーン以後(我が受賞の弁)『新潮』昭 44・6)とはっきり宣言している。ただ、その「啓蒙」に際して選り取られた方法が、感性的了解を促す説得的語りであったがゆえに、「理論」を対象とする筆の常道である「説明」や「解説」が軽視されてきたことも無視できない。

『少年愛の美学』の突出した行為遂行的語りの戦略と、そのようなテクストの様式をもたらした生成過程における読者の参入と双方向性、それらを実現し得た雑誌メディアの限定的条件に関しては、すでに拙論「稲垣足穂『少年愛の美学』の読書論的研究——念者としての語り——」（橋本裕之編『パフォーマンスの民族誌的研究』所収、平20・2）で詳細に論じた。

また、『少年愛の美学』の「同調＝応用＝実践＝善用」については、竹宮恵子ら「花の二四年組」の少女マンガ家による「少年愛マンガ」に始まり、雑誌『JUNE』掲載の「JUNE小説」、「やおい」、「ボーイズラブ」といった「女性がつくり楽しむ男性同士の性愛物語」の系譜と展開を想起すれば十二分に事足りるだろう。

とすればいまこそ、『少年愛の美学』を「文芸的啓蒙の文書」として読む足穂の意図から離れて、『少年愛の美学』に代表される「A感覚」論がどのような経緯で、どのような内実をもって成立したのか、その舞台裏を「解説」することが、重要となってくる。繰り返される改稿とテクストの断片化に伴って、次第に醜化し、明確な意味内容がとりづらくなっていき、事実確認的な側面が曖昧化して、行為遂行的な側面に特化した『少年愛の美学』のテクストに、社会的文脈や歴史性を再導入することで、『少年愛の美学』を「啓蒙」という「閉域」から離脱させることができるはずである。

本稿では、「A感覚」を「フロイトの精神分析」との「近親性の確認」から始めることで、「空しい」とされてきた「A感覚」論の分析を試みることにしたい。それは、日本におけるフロイト受容と、それに伴う足穂のフロイト理論への理解の変化にしたがって変貌してきた「A感覚」テクストの痕跡を跡付けることになるだろう。

二 「A感覚」とは何か

まず、フロイトに関して正面から論じる際には、足穂に関する場合のみならず、汎性欲主義の俗流フロイト説は、指弾され、慎重に排除されるのが常であろう。そして『少年愛の美学』や「A感覚とV感覚」（『群像』昭29・7～9）といった、性を主題として扱った稲垣足穂のテクストを論じるときもまた、足穂の「A感覚」論を「汎性欲主義の俗流フロイト説」として軽々に片付けることは、足穂のテクストを肯定的に捉える先行研究においては、慎重に回避されねばならなかったのかもしれない。

「A感覚」を「フロイトの精神分析」との「近親性の確認」によって説明することが「空しい」、という言い草の裏には、そうした配慮が感じられる。しかしながら、やはりこれらの性を主題としたテクストを扱うに当たっては、足穂のフロイト受容という問題を避けて通ることはできない。なぜなら、足穂の一連のいわゆる「A感覚」論は、フロイトの性欲論の言説なくしては成立しなかったと言えるほどフロイト言説の強い影響下に展開されたものだからである。とりわけ、フロイトのリビドー理論において語られる幼児期の「肛門性愛」を恣意的に特化した、「汎性欲主義の俗流フロイト説」という側面を、否応なく「A感覚」論は持っている。

たしかに足穂は一連の「A感覚」論でフロイト以外にも、クラフト・エビングやハヴェロック・エリス、アルベルト・モルといったさまざまな性科学者の論文や「通俗性欲学」の著作、「同性愛」や「少年愛」に関連する文献など、古今東西から実に種々雑多な言説を取

り込んでいる。それでも本稿がフロイトを持ち出すのは、「A感覚」論の核となる論拠を提供しているのが、フロイトの性欲論だからである。ここからはまず、フロイトの性理論との関連を軸として、足穂の『少年愛の美学』に連なる「A感覚」テキスト群を検討し、その理論的基盤の形成過程を跡付けていくことを目指す。

だが「A感覚」論の理論的な検証に入る前に、ひとつ些細な点にふれておきたい。それは「A感覚」「P感覚」「V感覚」といったこのアルファベットによる性的感覚の表記がいったい何に由来するのか、という点である。

有力な候補として、フランク・ヴェデキント『春の目ざめ』（野上白川訳、東亞堂書房、大3・6）が考えられる。『春の目ざめ』は足穂が一五、六歳で読み、それ以来もつとも愛読した戯曲⁽⁵⁾である。アンケート「私のベストテン」（『文藝往来』鎌倉文庫、昭24・4）でも第一に本書をあげており、足穂のテキストにおいてもつとも頻繁に登場する作品でもある。その『春の目ざめ』第二幕第一場のメルヒオールとモーリッツの対話には、「でもねえ君実際みんなの考へてるのは此処なので、世の中は要するにP……とV……なんだからね！」という一節がある。野上訳⁽⁶⁾にはここに注釈がついており、「Pは……Penis、V……はVulvaを指す。」と書かれている。足穂は戦後直ぐに「春の目ざめ」の東童（東京童話劇協会）による上演を観劇して涙を流し⁽⁷⁾、『春の目ざめ』の一節をエピグラフに据えた『彼等（THEY）』（桜井書店、昭23・11）も出版しており、戦後再び本書を手にとって、ヒントを得た可能性は相当にあるのではないか。

このように戦後の足穂のテキストに「A感覚」論の端緒を求めた

のには、理由がある。足穂は「少年愛」をモチーフとしたテキストを、その文壇デビュー当時から数多く残している⁽⁸⁾。また、断片的な「少年愛」に関わるエッセイ群も初期から散見される。しかし、その性愛論がまとまった形で、そしてある種の「文化論」的な広がり萌芽を見せ始めるのは、カストリ雑誌に載った江戸川乱歩との対談「そのみちを語る・同性愛の」（『くいーん』昭22・12）からだと思われるからである。

そして、この対談に足穂の文責で主に足穂の発言部分に加筆訂正が加えられた「E氏との一夕」（『作家』昭26・5）を皮切りに、芥川龍之介との稚児談義を語った「澄江堂河童談義」（『作家』昭28・1）、アンドレ・ジイドの『コリドン』について語る「『美少年的なもの』を繞りて」（『作家』昭28・5）、「A感覚」という概念が初めて提出された「A感覚とV感覚」（『群像』昭29・7・9）、掉尾に「続・A感覚とV感覚」と付された「異物と空中滑走」（『群像』昭30・10）、「Prostata~Rectum 機械学」（『作家』昭32・4）など、矢継ぎ早にこの膨大な分量の「A感覚」論を発表し続けることになる。それは、戦時中から続く「少年愛」というモチーフに対する後ろめたさや、カトリック時代に顕著となる「少年愛」への罪障感と、その背景となる貧窮とアルコール中毒による幻覚、自殺願望などが、昭和二五年の結婚に伴う京都移住によって大きく和らいだことに起因しているとも考えられる。

そして、「E氏との一夕」以後の膨大な「A感覚」テキスト群の集大成こそが、これまで見てきた『少年愛の美学』であった。その集大成も繰り返し増補、改訂が行われたわけだが、そうした引用などが増えるにつれて、「A感覚」論の理論的な骨格自体は見えづら

くなっていく。そのため、まずは「A感覚」論の初期テキストからその骨格を確認しておこう。

さてわれわれは前回のエッセイにおいて、A感覚の、V感覚との差異について述べる所があつた。即ち、フロイドにもとづいて、膣感覚を以て腸管排泄時の快感の変形だと見るかぎり、V感覚以前に、A感覚が、おそらく単孔類状態のまま保存されているのでなければならない。そしてV感覚の、開花的、平面的、期待的、乱れがちなのにくらべて、A感覚には、狭窄的、垂直的、拒絶的、抑制的な諸特徴があるとなした。で、つけ加えて云おうとする。——V感覚が、湿潤的、散文的自明性に置かれてゐるのに対して、A感覚は乾燥的で、詩的夢想性をその量としている。且つ後者は官能的に展かれることがないから、いつしか精神性として蓄積したものを時あつて抽象化する作用を持つてゐると。（『異物と空中滑走』『群像』昭30・10、傍線部引用者）

足穂が「A感覚」というタームを初めて用いたのが「前回のエッセイ」である「A感覚とV感覚」（前掲）である。ここにはその理論が「フロイドにもとづいて」いることも記されている。この傍線部は、フロイトの性欲論の代表的論文「性理論三篇」⁹⁾の、原注にあるルー・アンドレアス・ザロメの論文からの引用と、フロイトが批判を受けても執拗に固執したと言われる反復説、すなわち「個体発生は系統発生を繰り返す」という生物学説の二点に依拠している。前者については「性器は排出腔の隣にあり「女性の場合には間借りしているようなものである。」」（『エロス論集』一一三頁）とあり、後者に関して具体的には、幼児の肛門期性愛について「サディズム

が優位を占め、この領域が総排泄腔の役割を果たしていることは、この性的な体制が古代的な由来のものであることを示すものである」（同、一一三三頁）と言及している。

フロイトは「性理論三篇」を始めとする理論において、神経症や性倒錯について分析し、それらの原因を幼児期リビドーの抑圧と昇華に求めた。そしてその際に人間の成長に即した性的な体制の発展段階、つまり、人間が口唇期、肛門期、男根期を経て性器期に至るという、性感帯における部分欲動の中心の推移を図式的に示した。

足穂はこの幼児性愛のうちの肛門期の分析を特化・拡大解釈し、フロイトの発生論を敷衍しているといえる。『少年愛の美学』では次のように触れられている。

彼が、Aという最初の、しかも最大の「抑圧の対象」をとらえて、この部位における殆んど生涯的な刺激感受性の重大さを指摘した点を、私は注意したい。彼の功績はこれで十分で、あとは余計なお喋りだと云つてよい。「肛門本能」「肛門期」あるいは「肛門愛」等々の新造語こそ、それぞれが含有している将来性において、彼の残りの総ての業績に匹敵するのではあるまいか？（『稲垣足穂全集』第四巻、六七―八頁）

フロイトの発生論の中でも「A」（肛門）を「最初の、しかも最大の「抑圧の対象」として特権的に評価し、それ以外は「余計なお喋り」と切り捨てている。ではそれは、足穂にとって具体的にどう理解されているのか。やや煩雑となるが追つてみておこう。

まず、人間の個体の発生過程においては、性器よりも肛門の形成の方が早い。よって肛門は、人間の個体においても「最初期」の器官である。そしてフロイトの支持する反復説¹⁰⁾によれば、個体発生の

過程は系統発生、つまり生命の進化過程の圧縮された再現であり、性器が得る感覚よりも、肛門が得る感覚の方が、より原初の感覚であり、つまりそれこそが根源的な感覚である、ということになるのか。

また先の引用の続きにはこのエッセイの端的な要旨が掲げられている。

云わんとするのは、児童期以来、内面的に保持されている A 感覚に重心を置く自己色情が、抽象能力と結合して、能く個人的な思想芸術を生み出したというのである。最も純粹な意味に於ける学問や作品が常に幼心の完成だと云われている所以は、此処に存する。〔異物と空中滑走〕前掲

この部分ではフロイトのリビドー理論にもとづいた、欲動の昇華こそ「芸術活動の源泉の一つ」(『エロス論集』一九三頁)といった主張を、先ほどの「A 感覚」への特権的な注視に結び付けて敷衍している。フロイトにおいても「エロス」は芸術のエネルギーとして位置付けられていることは留意しておかねばならないだろう。ただ、このフロイトの「性理論三篇」との類似性を見るだけでは、「A 感覚」論が美学として普遍化される側面を掬い取ることができない。

それらを見ていくため、次にフロイト言説の受容を概観した上で、足穂の大正末～昭和初年代に書かれた「少年愛」に関わるテキスト群と、京都時代(昭和二十五年)以後から再び書き始められた「A 感覚」テキスト群におけるフロイト理解の転換について検討したい。それによって肛門感覚という性器的な感覚が、行為遂行的な側面だけでなく、事実確認的な側面においても、「A 感覚」という一つのイデア的性格を附与された操作概念へと変位していく経緯を明らかに

にできるはずである。

三 フロイトの受容

まず日本におけるフロイト受容について概観しておこう。

フロイト最初期の著書『ヒステリー研究』がウィーンで出版されたのは一八九五(明治二十八)年のことだが、明治三十五年頃には森鷗外が純医学的見地から「性欲雑説」(『公衆医事』明 35・11～明 36・11)でフロイトの性欲論に触れている。

精神分析学としてのフロイト学説の受容は、アメリカの心理学者を経由して紹介されたが、アメリカの心理学者スタンリー・ホルの著書を元良勇次郎らが訳した『青年期の研究』(同文館、明 43)にはフロイトの理論が援用されていた。これに次いで明治四十五年四月に雑誌『心理研究』に掲載された大槻快尊「もの忘れの心理」が日本における最初の精神分析文献とされている。その他、久保良英『精神分析法』(心理学研究出版部、大 6)、榎保三郎『性欲研究と精神分析』(実業之日本社、大 8)、前野喜代治『精神分析学』(東京広文堂、大 14)などがフロイト学説の紹介概説書として刊行されている。

しかし、こうしたフロイト学説の紹介概説書などは、非常に専門的な内容であって、フロイトはこの頃の日本においては、一部の心理学者のあいだで語られるのみであった。日本でフロイトの名を広める一面を担ったのは、『改造』大正十年一月号に発表された厨川白村の「苦悶の象徴」だと思われる。この評論はフロイト理論を援用して、広く読まれ、大正十三年二月に同題で出版された評論集は、

二ヶ月で五十版を重ねたという。曾根博義氏は「フロイトの紹介と影響——新心理主義成立の背景——」（昭和文学研究会編『昭和文学の諸問題』所収、笠間書院、昭54・5）の中でこの評論に触れ、フロイトの紹介というより曲解で、大正生命主義にマッチした浪漫主義的、楽観的な文学論だったと指摘しているが、関東大震災によって遺作となったこのベストセラーがフロイトの名を更に広範に伝えたことは間違いないだろう。

フロイト原著作の邦訳の方は、安田徳太郎『精神分析入門』上下巻（アルス、大15（昭2））が最初であった。昭和三年には大槻憲二らによって東京精神分析学研究所が設立され、昭和四年頃から春陽堂版『フロイド精神分析学全集』とアルス版『フロイド精神分析体系』が前後して出版されている。二つの出版社から、同時に全集が出版されるという事態を見ても、フロイトへの関心の高まりが知れよう。

そして、この大正末期から昭和初期にかけてのフロイト・ブームの中で、多くの人々と同様、足穂はフロイトを受容していたと思われる。少年への性的嗜好は、大正期の性科学によってすでに「変態性欲」として囲い込まれていたが、足穂は早くから、性愛の嗜好について評論などで積極的に発言している。例えば、少年への嗜好は病的な倒錯であることを認めつつ、病的でない何事が芸術で有りうるだろうか、といった逆説的な主張を、最初期の「少年嗜好症」を主題的に扱ったエッセイである「私の耽美主義」（『新潮』大13・6）などで行っている。

フロイトへの言及に目をやると、その「私の耽美主義」（前掲）や「WC」（『文芸時代』大14・1）などでは、「変態性欲」や「近

頃やかましい精神分析学」について言及されているが、まだ「美とはつまり性欲の変形に他ならぬといふことを力説するその学説」（「WC」といったややネガティブな評価しか見てとれない。

しかしそのおよそ五年後、「少年読本——エッセイ風な創作」（『グロテスク』昭5・1）では、次のようなフロイトへの言及が認められる。

機械とか思想がすでに、一つのSatiであることは、初めにも云いましたが、れいのフロイトによってもそうなるはずです。

——「たいに性慾などということを引き出すならどんな事だっ
て解釈がつくと私は思うのですが。と云ってこの常識学派が私
たちの背後に横たわり且つ私たちを支えている無意識の重大性
について注意を喚起しようと努めているのは結構なことだと云
わねばなりません。

ここで足穂はフロイト理論の汎性欲主義的側面を批判しつつも、フロイトの意識と無意識といったメタ心理学的側面の重大性を喚起している。この昭和五年頃は正に「フロイト・ブーム」の真っ只中であり、ようやくフロイトの原著の邦訳も出始めた頃であった。足穂は同じエッセイの中で具体的にフロイトの「学説」についても言及している。

この学派が所謂倒錯的傾向（こんな言葉も私はもはや消極的
だと思うのですが）についてどう云っているかと云うと、私た
ちの感覚というものには二種類ある。「さきの感覚とあとの感
覚」である。あとのものとは吾々の機関が相当な発育をとげた
ときに現われる。つまり、行為がとげられたあとにくる満足し
たものだが、こんな後快は、少年期にはない。少年期にあるの

は、いつも期待と緊張感のうちに進められている。即ち「さきの感覚」である。そして云うところの倒錯症とはこの種の感覚がそのままに発展したものに他ならない。子供がオートモービルや電車におけるリズムを好むのもそれであるが、こんな *fröeroticism* の一つとして *Analerotik* という言葉があげられる。生まれてから口唇における吸引などいうことに注がれてきた感覚が、やがてその対蹠点へも向うようになって、そこにおける刺戟や緊張を好むようになることは、出来るだけ我慢をしたいために便所へ行くことをこばむ子供があることによってわかる……などと申していたようです。（「少年読本」前掲）

足穂がこれらフロイトの「学説」を摂取したのは、その内容から見ておそらく、先ほどと同様『性理論三篇』からだと思われる。ただ、この時点で春陽堂版、アルス版の両全集でも「性理論三篇」の邦訳は未刊で、その内容をどのような経緯で知ったかは判然としない。ここで足穂が触れている通り、フロイトの主張する性的な体制の発展段階において、得られる性的快感は二つに区別される。それが「さきの感覚」＝「前駆快感 (Vorlust)」と「あとの感覚」＝「充足 (最終) 快感 (Endlust)」である。

この性的な体制の発達には、口唇期から肛門期、男根期を経て正常な性器体制へと、性感帯における部分欲動の中心が移っていくのだが、この前性器的な体制にあたる肛門期においては、「充足快感 (Endlust)」はまだ存在せず、「前駆快感 (Vorlust)」のみがあるとされる。

また肛門期は、より幼い口唇期と比して、受動性 (マゾヒズム) と能動性 (サディズム) の両個性を含むものの、男女の差異はなく

(男女の未分化状態)、性対象が他者へと向けられる段階でもない、圧倒的に自体愛 (オートエロティシズム) 的な段階であって、「機械的な興奮」もこれら前性器的な体制に顕著なものだ、とフロイトの『性理論三篇』では論じられており、ここには足穂の記述とほぼ完全に一致する主張が確認できる。

足穂の、この時点におけるフロイト理論への着目点は、先に見たように、後年の「A 感覚」テクスト群の理論的基盤を形成する部分とほぼ同じ、肛門期の幼児性愛についてである。このまだ「あとの感覚」を知らない「さきの感覚」＝「前駆快感 (Vorlust)」と、肛門期の受動性 (マゾヒズム)、能動性 (サディズム) という両個性、そして「男女の未分化状態」という要素は、のちに「A 感覚」をある種の超越的な感覚として規定していく時に、非常に重要な役割を担うことになるものである。

しかしながら、ここには、「個体発生は系統発生を繰り返す」という「反復説」への注視がまだない。そしてこの「反復説」という滑らかな連続面＝全的な歴史性の導入こそ、「A 感覚」を原初の最も根源的な感覚であると規定する論拠であり、個体の発達過程の順序を、太古からの歴史性として価値基準化し、単なる性器的な感覚を、「少年愛の美学」という一つの価値体系として普遍化させるものにはかならないのである。

ではこのような、肛門感覚という一つの性器的な感覚が、いつ、どのように「A 感覚」というある種の普遍性をもった記号へと変化するのだろうか。再びヴァリアント間の記述の変化に目を向けることにしたい。

四 「A感覚」論の美学化

足穂は、昭和五年の「少年読本——エッセイ風な創作」（前掲）における先に見たフロイトや精神分析学に対する見解を、後年になって撤回し、フロイトへのシニカルな態度が、一転して讃辞へと変わっている。^⑪

私はフロイトについては、永いあいだ、新奇な、しかし臆面もない、（思想的）灸針術か採療治の類だと解していた。そうでないと友人に注意されても、「セックスというような茫漠とした原理を持ち出せば、何事だつて一応の解釈はつけられる」という考えから、自分は離れることが出来なかった。世に漫画家ほど漫画的対象はなく、心理学を持ち廻る者ほど、心理学的資料に叶うものはない。これが私の持論だった。つまり私は、亜流の上にのみ成立する事柄を本物の上に及ぼそうとしていたわけである。フロイトが宿弊を打破するために、敢てむきつ、けな云い方を採ったということが、未だよく呑み込めなかった。

この間違いに気付くためには、殆ど三十年の歳月が必要であった。いまはシュールレアリスムの先輩たちに伍して、「永遠なれ、ウィーンの学者！」（『少年愛の美学』『稲垣足穂全集』第四巻所収、六六―七頁）^⑫

では昭和五年から三十年の歳月をかけて、足穂がどのような「間違いに気付」き、フロイトはどういった「宿弊を打破するために、敢てむきつ、けな云い方」をとったのだろうか。それを確認するためには、フロイト自身の主張を見る必要がある。

フロイト『性理論三篇』（一九〇五年）の第四版（一九二〇年版）の序によると、

本書では、人間のすべての営みにおいて、性が重要な位置を占めると主張し、性の概念を拡張しようと試みている。そしてこれが、精神分析に抵抗するための大きな動機を提供していることも忘れるべきではない。精神分析は「汎セックス主義」であるというようなキャッチフレーズが唱えられ、「すべて」を性によって解決しようとしているという無意味な非難が投げかけられている。これは人々がいかに情緒的な要因によって混乱し、忘却するかを示すものに他ならない。哲学者アルトゥル・ショーペンハウアーが、人間の活動が通常の意味での「性」によつて、いかに大きく左右されるかを明らかにしたのは、ついこの間のことである。読書人であれば、この驚くべき知識を完全に忘れることはできなかったはずである。性の概念の「拡張」は、いわゆる性倒錯者と子供たちを分析することで必要となつたものである。精神分析を見下しながら、精神分析の理論を軽蔑されておられる方々には、拡張された性という精神分析の概念が、〈神のごとき〉プラトンのエロスの概念とごく近いものであることを思い出していただきたい（これについては、ナッハマンゾーンの「フロイトのリビドー理論とプラトンのエロス説の比較」『国際精神分析雑誌』第三巻、一九一五年を参照されたい）。（『エロス論集』二二―二頁）

とされている。この序について訳者の中山元は、次のように述べている。

フロイトの「性的なもの」という概念には最初から疑惑と誤

解がつきまとうていた。フロイトはこの性という概念がいかに人々から顰蹙をかったかを、繰り返し回顧している。そしてその誤解の根源は、性的なものと生殖的なものの混同にあった。

性セックスという言葉は、生殖的なもの、あるいは性器的なものとして考えられがちである。しかしフロイトにとっての性的なものとは、人間の生殖的なものに限定されない「拡張された性の概念」(『性理論三篇』序)という意味をもつものであった。(中山元「エロスの一般理論の試み」、『エロス論集』所収、前掲、三九八―九頁)

フロイトの「拡張された性の概念」は、生殖的なものや性器的なものに限定されない概念であり、フロイト自身がいうところの「(神のごとき)プラトンのエロスの概念」といった、人間にとって普遍的で根源的な何ものかを読み解く鍵であった。フロイトは「エロスの欲望がいかにして人間の認識や判断を可能にし、人間が意識の主体でありうることを可能にするか、またこの欲望がどのように人間の性格を規定し、文化のありかたを左右する力をもつか」という問題を考察した(同、四〇〇頁)のである。そして足穂が昭和三〇年代に至って、汎性欲説という「無意味な非難」を撤回するのは、この「性的なもの」の根源性、普遍性の主張を評価するからである。

ただ、足穂はこのフロイトの「拡張された性の概念」を、人間の主体性の問題系としては捉えていない。『少年愛の美学』において、止みがかたい性衝動や、自らの主体を規定するエロスが語られることはない。「拡張された性の概念」は足穂の「A感覚」論にぴったりと当て嵌まるが、足穂はフロイトにもとづきながら、人間を内部から衝き動かす根源的な力としてではなく、どこか外部からやってくるものとして「エロス」を捉えている。つまり、どのようにして身体がその「エロス」を感じ取るのか、という問題系として捉えられているのである。「Uranisme」には、正規の「ポルト・ナット関係」(VP交渉)では見失われている前セックス的「エロス」を恢復しようとの意図がある(『少年愛の美学』三五頁)とされるが「Uranisme」とは「少年愛」、「A感覚」であり、「VP交渉」とは、男女の異性愛を指している。異性愛において自明なものとなっている「エロス」が人間の主体性を規定するとしても、もともとその「エロス」がどこから来たのか、という問いが足穂には必ず存在している。そこには、宇宙に遍在する「意志」が人間の生きようとする性衝動を規定している、というショーペンハウアーの哲学の残影を見ることができるかもしれない。

実際に足穂は「カントの『物自爾』デイングアンジヒ ショーペンハウエルの「意志」ライプニッツの「单子」モナド プラトンの「イデア」(『Protagoras』Recht機械学)『作家』モナド 昭32・4)といった「不可知なるもの」を捉える感覚として「A感覚」を語っている⁽¹³⁾。その不可知で根源的な何かを、どこでどのように知覚するか、これが「A感覚」論の命題であり、それは生殖的なものや性器的なものではなく、美や死や永遠へと繋がっている。

ここで想起されるのは、「宇宙的郷愁」という概念である。それは例えば、次のように語られる。

折ふし自分を捉へて、淡い焦慮の渦に捲きこむ相手を、曾てボクは一種の「永遠癖」だと解釈した。不十分なので、「宇宙的郷愁」に取り換へたけれど、この都会的、世紀末的、同時に未来的な情緒は、夙に自動車のエグゾーストの匂ひ……雨降る

ちまたに嗅ぎつけたあのガソリンの憂愁の中に、兆してゐた。

〔ボクの『美のはかなさ』——存在論的モザイク——〕『作家』
昭27・8）

この「情緒」は、ほとんど「A感覚」についての説明と同様の語り口であることがわかる。「宇宙的郷愁」については拙論『哲学書は美しき肉体の如くに——再演される「美のはかなさ」』（『ユリイカ臨時増刊』平18・9）において詳しく検証したように、失われた記憶、かつて一瞬だけ自分に属して、すぐにどこかへ消え去って取り戻すことのできない記憶が、ベルグソン『物質と記憶』に由来する「純粹記憶」のように外界に蓄積されており、そのような外部への触知の情緒が「宇宙的郷愁」とされていた。乱歩との対談「そのみちを語る・同性愛の」（『くいーん』昭22・12）では、「同性愛」について、「これは我々にある宇宙的郷愁の一形式、イデアの世界からの投影で、それらは第三秩序に属するプラトニック・ラヴのカリカチュアに過ぎない」と語っている。「宇宙的郷愁」という言葉も、この対談が最初期の使用例である。そして「少年愛」という言葉に關しても、管見に及ぶ限りでは、「前髪論」（『文芸ビルデング』昭4・6）、「少年読本」（『グロテスク』昭5・1）以来、初めての使用例である。¹⁴

「ボクの『美のはかなさ』」において「宇宙的郷愁」は、美の源泉たる「永遠」が、一瞬間しか捉えられないことに対する「うれひ」であり、その「永遠」としての美は、「ボク」にとって、常に既に失われているものであった。つまり、「宇宙的郷愁」は「不可知なるもの」（『美の源泉』永遠＝死）を失われた根源的なものとして感じとる郷愁として定義できるものであったのである。われわれ自

身もそこからやってきて、一瞬この世界に属して、そこへ帰って行くのだという意味で、「不可知なるもの」との接触の気配は「宇宙的郷愁」と名指される。そしてこの「宇宙的郷愁」を、どのようにして感じるができるのか、人間にとって不可知の根源的なものを、エロスのな身体感覚から語ろうとするのが、「A感覚」論であり、だからこそ、性愛を扱う「A感覚」論は、美しいものを感じとる感覚として語られ、美学として提示されるのである。

フロイトの序文に見られる、「拡張された性の概念」が（「神のごとき」プラトンのエロスの概念に近い」という言葉は、足穂においては「プラトンの郷愁」（『少年愛の美学』八八頁）と言い替えられ、理解されている。足穂の場合、「エロス」は外部（＝宇宙）からやってくる根源的なものであるという点に注意しなければならない。男女の間の「エロス」は、二次的な利用にすぎないのである。したがって、「宇宙的郷愁」を身体感覚に即して、身体と「不可知なるもの」との接触の瞬間を語ろうとするのが、「A感覚」なのだといっている。

そしてこの「不可知なるもの」との接触を志向する概念の成立には、「肛門感覚」を原初の感覚だとするフロイトの反復説、「個体発生は系統発生を繰り返す」という人間の内部（深層）に外宇宙（歴史性）を見出す形而上学導入のテーゼが不可欠であり、フロイト理解の転換は、「宇宙的郷愁」と人間の身体を、「A感覚」によって接続する契機、『少年愛の美学』形成の契機だったのである。

五 江戸川乱歩との交流

本稿では、足穂のフロイト理解の転換を跡付けていくことで、性の問題系が、「不可知なるもの」（＝永遠）に触れることで美を感じとる「A感覚」論として展開されていく『少年愛の美学』の形成過程を見てきた。しかし、昭和五年頃からのフロイトへの偏見が、昭和三〇年代頃になって一転するのは、足穂の内的な思想の変遷だけから語られるべきではない。

昭和六年九月の満州事変にはじまる戦時色の高まりに伴って検閲・自主規制も強化され、通俗性欲学などの言説が根こそぎ消滅、国家総動員体制が本格化する頃には性に関する言説自体が低迷していく、厳しい時代であった。戦後に至ると、反動的に性の解放が叫ばれるわけだが、大正期から昭和初期にかけて盛んであった性に関する言説が再び活発化し始めるのが『キンゼイ・レポート』(1960)に象徴される、昭和二十五年以降の性に関する科学的言説の瀾漫の時期である。フロイトの著作の翻訳が、再び刊行されるのもまた、この時期であった。¹⁵ 足穂のフロイト理解の転換が、こうした戦前から戦後にかけての言説配置の中の、性に関わる言説の多寡といった社会的な背景のもとで起こったことは間違いない。

しかしまた、足穂は昭和十年代にはキリスト教に接近し、昭和十八年から二十四年頃まで教会へ赴き、聖書、公教要理、祈祷書などでカトリックの教えを学んでいた。そこでは当然、「少年愛」は赦されざる姦淫とされる。こうした背景の下、「少年愛」についておおっぴらに語ることはない時期は長かった。戦後もしばらくして

足穂がキリスト教から遠ざかり、再び「少年愛」をおおっぴらに語りはじめるときつかけは、やはり江戸川乱歩の存在を抜きにして語ることができない。

乱歩は友人の岩田準一とともに、古今東西の「同性愛」に関わる文献を集めており、対談「そのみちを語る・同性愛の」（前掲）では、足穂ははつきりと「同性愛」を中性的傾向として語る乱歩に異議を示し、「少年愛」こそ永遠なるものに繋がる男女の性を越えた超性的傾向である、完全な人間のモデルとして美少年という原型があり、美少女と美少年は入換可能と主張する点で、足穂の主張は「無性格論」（『虚無思想』大15・5）の頃と同工であり、乱歩に依拠して語っていないことも分かる。ただ、足穂が同性愛に関する膨大な知識と資料について乱歩から教示され、フロイトなどについても、情報を得ていた可能性は大いにある。乱歩の背後にいた浜尾四郎、岩田準一、南方熊楠、中山太郎といった、岩田をハブとする戦前の同性愛研究家たちは、戦時中にあらかたこの世を去り、繋がりも消えてしまつて乱歩だけが当時、秘密のネットワークの知識を受け継いでいた。乱歩ら同性愛研究サークルの情報の蓄積の内実を、足穂の「A感覚」テキストの形成過程に重ねることができれば、より立体的に言説空間の中での位置づけを把握することができるだろう。

腿が触れ合う感覚を「不可知なるもの」と結びつけ、「宇宙的郷愁」の着想さえも乱歩の叙述に由来し、戦後の「A感覚」エッセイ群も乱歩との対話に始まることを考えれば、生活の援助者としてだけでなく、足穂にとって同性愛研究家・グレコマニアとしての乱歩の存在の大きさは比肩するものがない。「同性愛の精神」を「物事を抽象化する精神」と捉え、「男女未分化の人間への憧れ」と語る乱歩

の対談中の同性愛論を『少年愛の美学』における重要な命題として吸収していることや、岩田準一の遺稿を自らの手で雑誌に連載していた乱歩が、連載中絶したその雑誌を足穂に送っていたことなども分かっている。⁽¹⁶⁾ 乱歩との交流は、フロイトの性理論を始めとする性研究の情報源としてさらなる検証が必要となるだろう。乱歩の存在はいわば、『少年愛の美学』が昭和二十五年以降さまざまなヴァリアントを生み出しつつ、「少年愛」が形而上学として形成されていく最初のきっかけであったといえるのではないだろうか。

注

- (1) 高橋康雄「月とA感覚」（稲垣足穂『月球儀少年 極美についての一考察』所収、昭63・6、七二〇頁）参照。
- (2) 『タルホ／未来派』（河出書房新社、平9・1、一二八頁）参照。
- (3) J. L. オースティン『言語と行為』（坂本百大訳、大修館書店、昭53・7）参照。ただここで言う事実確認的／行為遂行的側面の区別は、実体的なものではない。テキストという意味生成の現場において、叙述内容がより直接的に指示する意味内容と、叙述方法自体が文脈依存的にもたらす意味作用の偏差の目安としてここでは用いている。
- (4) 石田美紀『密やかな教育（やおい・ボーイズラブ）前史』（洛北出版、平20・11）の帯文より引用。本書には、竹宮恵子や増山法恵へのインタビューも掲載され、足穂の『少年愛の美学』が、ヘッセに並ぶ「少女マンガにおける『少年愛』の起源」であったことが論証されている。いわば『少年愛の美学』というテキストは、「啓蒙の閉域」を跳び越え、少女マンガによって「同調＝応用＝実践＝善用」されたのである。
- (5) 高橋信行編『足穂拾遺物語』（青土社、平20・3）に収録された中学時代の『学友会誌』掲載の「六月の夜の夢」には、すでに『春の目ざめ』（東亜堂書房、前掲）からの引用が見られる（高橋信行「解題」参照、『足穂拾遺物語』所収、前掲）。
- (6) 田村道美「野上弥生子とフランク・ヴェデキント―『新しき命』と『春の目ざめ』―」（『香川大学教育学部研究報告』第1部、平6・9）によると白川野上豊一郎は、先に雑誌『モザイク』に『春の目ざめ』の訳を英訳本から明治45年7月、8月、大正元年11月の三回にわたって発表していたという。また著者ヴェデキントから直接許可を得て東亜堂書房から出版されたのちも野上は改訳を続け、野上訳だけでも岩波書店版（大13）、岩波文庫版（昭2、

注釈無し）、岩波文庫版改訳（昭9）、学陽書房版（昭24）と訳を重ねている。

(7) 「モリーリッツは生きてゐる」（『新潮』昭24・1）等参照。

(8) 「少年愛」という用語が足穂のテキストにおいて定着して使用され始めるのも、「E氏との一タ」（前掲）以後、京都移住後のテキストにおいてである。「少年愛」という概念の成立と展開については、別稿の準備がある。

(9) S・フロイト『エロス論集』（中山元訳、ちくま学芸文庫、平9・5）所収。以下フロイトからの引用、用語、頁数は新訳の本書に拠る。

(10) エルンスト・ヘッケルが『一般形態学』（1866）で主張した「生物発生原則」とも呼ばれる生物学説である。「反復説」の定義についてはステイヴァン・J・グールド『個体発生と系統発生』（仁木帝都・渡辺政隆訳、工作舎、昭62・12）等を参照した。

(11) 「ヒップ・ナイドに就いて」（『作家』昭33・4）では、「何十年もあとになって、私はとうとうフロイトの中に読み当てた」としてフロイトの「肛門愛」を卓見と高く評価しているが、引用した文がほぼそのまま加筆されたのは「増補 HDB-NIDE」（『作家』昭34・4）から。

(12) 「少年愛の美学」の「はしがき」には、

「想像力とは最も連結したいものの同士を繋ぐことを云い、意想外とは、常に通俗性を打破するイロニーの一形式である」これは、三田文学に、西脇順三郎が載せたシュールレアリスムに関するエッセイ中に憶えている文句だ。自分に、「ヒップ」を主題とする奇想曲」が書けないものかしら？（『稲垣足穂全集』第四巻、七頁）

という言葉も掲げられており、シュールレアリスムの「想像力による意想外の連結」が、「少年愛の美学」の構想の基底にあり、そこでこそフロイトは再び評価されているとも取れる。ただ、本論考の目的からは外れるため、「A感覚」によって意想外のもを連結する身振りと、シュールレアリスムの方法意識との関連性については、別稿を期したい。

(13) この記述は、そもそも江戸川乱歩「彼」（『ぷろふいる』昭11・12・12・4）の次の記述に拠っている。

彼はそういう際の肉体的感覚を今でも思い出すことができる。それは寝ていて自分の腿の内側と内側とが触れ合う、擦ったような、総毛立つような、そしてまたひどく懐かしいような感触であった。その感覚自体が何かしら空の星のごとく遙かなるものを象徴するかに感じられた。大人の言葉で表現すれば、「物自体」とか「意志」とかいうものに似ていた。それはプラトンの二頭馬車のように、無限の天空を天翔けるものであった。

少なくとも彼の経験では、少年時代の性欲はつねに死を連想したのであるが、この幼年時代の腿の感触も永遠なるものと共に死に結びついていた。

(14) 対談の初め、足穂は「少年愛好」という語を使用しており、乱歩が「少

年愛」という語を用いたあと、足穂も「少年愛」という語を使用し始めているため、「同性愛」に比較する形で「少年愛」という語をここで使用し始めたのは、乱歩ということになる。

(15) フロイト理解の転換に際して、足穂が読んだと思われる『性理論三篇』に関しては、戦時中の出版はなく、『フロイト精神分析学全集』第五卷、性慾論・禁制論（矢部八重吉訳、精神分析学研究所、昭6・3）以来、再び訳出されるのは『フロイド・性慾論 性理論に関する三論文』（大槻憲二訳、東京精神分析学研究所出版部、昭27・7）と、『フロイド選集』第五卷、性慾論（懸田克躬訳、日本教文社、昭28・3）を待たねばならない。

(16) 「私の秘蔵本 岩田準一・後岩津々志」解題（『足穂拾遺物語』所収、前掲）参照。